



BECHSTEIN KLAVIERSCHULE

ピアノ教育の現場から——

ベヒシュタインピアノの特性を活かしながら、音楽をより深く理解するピアノ教育を実践している内藤晃先生と石本育子先生のお二人による「ベヒシュタイン シューレ誌上特別レッスン」。第2回目の今回は「和声の移り変わりをを感じる」をテーマにお届けします。

内藤晃先生の レッスン開催決定

本誌上で「ピアノ音楽を表現すること」について、毎回様々な角度から分かりやすく解説いただいている内藤晃先生のリアルレッスンを汐留ベヒシュタイン・サロンにて開催いたします。ベヒシュタイン シューレの実際をぜひ体感してください。

■日程：2020年12月4日(金)

■会場：汐留ベヒシュタイン・サロン
東京都港区東新橋2-18-2
グラディート汐留1F
TEL:03-6432-4080

■受講枠

- (1) 10:30-11:20
- (2) 11:30-12:20
- (3) 13:30-14:20
- (4) 14:30-15:20

■料金

一般 11,000円(税込)
サロン会員 10,500円(税込)

■講師メッセージ

音楽という流動的な生きものを楽譜という殻の中に押し込めるのは、実はとても大変なことです。そこからこぼれ落ちてしまった大切なものを掬い取って命を吹き込むべく、音楽と楽譜のはざまで思いをめぐらせています。すばらしい楽器は、再び生まれてくる音楽に色彩と生命力をもたらししてくれます。汐留の名器ベヒシュタインとともに、音楽の生まれ出る瞬間のわくわくするような新鮮な感動を皆さまと分かち合いたいと願っております。

内藤晃

■受講希望・お問合せは、こちらまで！

yamada@bechstein.co.jp
TEL:042-642-1040
(八王子技術・営業センター
営業時間9:00-17:00、土日休み)
担当：山田

和声の移り変わりを感じて。



内藤 晃
(ピアニスト)



石本 育子
(たかまつ楽器ピアノ講師)



加藤 正人
(ベヒシュタイン・ジャパン代表)

石本：私のピアノのレッスン、既存のテキストも使いますが、少し曲のチョイスが変わっているかもしれません。

年齢で言うと6歳前後の生徒に、
ギロック「雨の日のふん水」

J.S.バッハ「平均律1巻1番プレリュード」

あと少し大きくなるとベートーヴェン「月光第1楽章」を課題としてよく弾いてもらっています。

課題を「弾ける練習」ではなく「和声の移り変わりを感じて音にする練習」をしてもらうためです。

内藤：脳で感じている音楽の変化が演奏に反映されるには、その指令が届くまでにわずかな時間が必要で、変化した瞬間にそれを感じても間に合いません。

脳で感じている部分と、手が弾いている部分には、少しだけ時差ができるわけです。「次にどうなるか」を常に前もって脳で感じながら、そちらの方向へと音楽を運んでいく必要がありますね。

石本：そうなんです！

平均律のプレリュードは1小節内で同じ形が繰り返されていくので初歩の練習に適しているんです。月光1楽章にしても次の和声を考えている時間がありますね。

譜例1 平均律第1巻～プレリュード 八長調

脳内の動きを楽譜に記すとこんな風になります(和声はコードネームで表記しました)

PRAELUDIUM I

The score shows the first two measures of the Praeludium I from the Notebook for Anna Bach. The first measure starts with a C major chord (C) and moves through a sequence of chords: C (1 2 4), Dm/C (次はDm/Cへ), Dm/C (1 3 5), and G7/B (次はG7/Bへ). The second measure starts with G7/B (3 1) and continues with: G7/B (次はCへ), C (次はAm/Cへ), Am/C (次はD7/Cへ), and D7/C (次はD7/Cへ). The piece is in C major, BWV 846.



内藤 晃
(ないとう あきら)

ピアニスト、指揮者、作編曲家。東京外国語大学ドイツ語専攻卒業。在学中よりピアニストとして演奏活動を始め、桐朋学園大学指揮教室、ヤルヴィ・アカデミー(エストニア)などで指揮の研鑽も積む。弾き振りを含む多彩な演奏活動とともに、「もっと深い音楽体験」を共有すべく、ユニークな発想でレクチャーや執筆を行う。月刊音楽現代に「名曲の向こう側」を連載、訳書にA.ゲレリヒ著「師としてのリスト」(近刊、音楽之友社)、校訂楽譜に「ジョン・アイアランド ピアノ曲集」「13人の女性によるピアノ小品集」(カワイ出版)などがあるほか、音楽雑誌やCDライナーノートの執筆も多い。札幌シンフォニエッタ、アビアント交響楽団、杉並グース合奏団などを指揮。2014年、全日本ピアノ指導者協会から新人指導者賞受賞。一次資料から作曲家の美意識を読み解く独自のレッススが各地で好評を得ている。CDに「Primavera」(レコード芸術特選盤)「言葉のない歌曲」(同準特選盤)などがあるほか、マリンバ吉川雅夫氏や作曲家春畑セロリ氏のCDでピアノを務め、一流ソリストや作曲家からも厚い信頼を寄せられている。主宰ユニット「おんがくしつトリオ」では教育楽器によるエキサイティングなアレンジが人気を博し、全国各地に招かれている。
www.akira-naito.com



石本 育子
(いしもと いくこ)

静岡県浜松市出身。信愛学園高等学校音楽科を経て武蔵野音楽大学音楽学部声楽学科卒業。古屋豊、川内澄江の各氏に師事。東京・浜松・香川において数多くのコンサートに出演するだけでなく、自主企画の演奏会を立案運営。独自の指導法による連続講座をピアニスト内藤晃氏と共に汐留ベヒシュタインサロンにて開催。たかまつ楽器青い鳥音楽教室主事。青い鳥マスタークラス主任講師。四国二期会会員。全日本ジュニアクラシック音楽コンクール及び東京国際ピアノコンクール審査員。



加藤 正人
(かとう まさと)

ドイツ・ピアノ製作マイスター称号を取得
現在ベヒシュタイン・ジャパン代表取締役社長

内藤:繰り返すところで、脳がいったん立ち止まって、「次を感じる」ことに集中できますからね!これが、スピーディーに絶えず移り変わっていく音楽になると、脳が次を感じながらフル稼働することになります。僕もひどく疲れている時などは、脳から音色への回路がスムーズでない時があり、そんな時は練習しないでスパッと休んだりするんですよ(笑)。「モグラ叩き」みたいになっちゃうので。

譜例2 平均律第1巻〜プレリュード 八長調
このような「モグラ叩き」の状態から脱しましょう!



石本:そうそう(笑)脳をフル回転させています。

今お話しするのは、「次の音符を読んでいる」というのとはニュアンスが違って、次の和声を感じることと音色を想起することを瞬時にやっているんですよね。そんな時に実際に音色のパレットに色がたくさんある楽器が大切かと。

内藤:ベヒシュタインは、要求に応えてくれるのはもちろんですが、とりわけ音と音のあいだの軌跡もクリアに聴こえ、中間色のグラデーションが美しく出るところが好きです。和声や調性の変化とともに、音色が翳ったり、あたたかな光が差したり。そんな微妙な陰翳こそ、人の心の琴線に触れてくるのではないのでしょうか。

加藤:ベヒシュタインは、mp〜fの音量、特に他のメーカーでは変化をつけるのが困難な中音域で、繊細にニュアンスの変化をつけられますね。ある部分をAのような造りにするとBのような特徴を出せる、とピアノ製作は単純にはいかず、ピアノの特徴は「構造の組み合わせ」で決まっています。

ベヒシュタインは発音される音の立ち上がりが早く、その直後のディケイと呼ばれる減衰が比較的早く、しかしサステーンが長いという音の特徴を狙っています。ハンマーが弦を打つアタック音の直後の減衰が早いということは、打弦タイミングのズレが聞き取り易くなります。ですから控えめに際立たせたい音をつくったり、響のスペクトルの変化を狙う時、ピアニストは例えば旋律と伴奏部に微妙な時間的なズレを、強弱の変化に組み合わせる事で、中間色のグラデーションをつけていると思います。ディケイが長い野太い音とは対照的な効果がベヒシュタインでは期待できます。

石本:ベヒシュタインの愛好家さんの中にはこのようなベヒシュタインの個性を知って中間色のグラデーションを探究し、より深い音楽表現を楽しんでいる方々がいらっしゃると思います。今回誌上レッスンに取り上げました方もそのお一人です。

内藤先生、石本先生がお感じになっているベヒシュタインピアノの特性を活かしながら、
実際どのように生徒さんたちに音楽を理解させていらっしゃるのか、
誌上レッスンと動画をリンクして公開いたします。